

一般社団法人日本応用地質学会
東北支部技術講習会「応用地形学実習」
開催報告

主催：一般社団法人日本応用地質学会東北支部

日時：平成27年6月26日 13:00～17:00 (12:30より受付)

場所：仙台市民会館 第3会議室

受講者：25名

<講習プログラム>

開会挨拶	日本応用地質学会東北支部 支部長	高見智之
1. 応用地形学の役割と最新動向		13:00～13:30
	応用地形学研究部会長 向山 栄	
2. 平地の応用地形学 (講習)		13:30～14:20
	応用地形学研究部会 足立勝治	
3. 平地の応用地形学 実習		14:20～15:00
4. 山地の応用地形学 (講習)		15:00～15:50
	応用地形学研究部会 小俣雅志	
5. 山地の応用地形学 実習		15:50～16:30
6. 講評と質疑		16:30～17:00
	応用地形学研究部会 向山 栄・足立勝治・小俣雅志・中曽根茂樹	

<講習会風景>



向山講師



足立講師



小俣講師



実習風景

1. 応用地形学の役割と最新の動向

地形図の読図により、地質構造、材質、形成過程が判断でき、今後その場で起こりうる現象を考察できることを教えていただきました。

また、最新のデジタル地形データの加工して、陰影立体図、カラー段彩陰影図、傾斜量図など、平面上で地形をより強調し分かり易い技術について紹介していただきました。

2. 平地の応用地形学

河川の土砂運搬により形成される河性低地と、波や風によって形成される海成低地についての説明がありました。

河性低地では、上流側から谷底低地、扇状地、蛇行河川、三角州と続くことを、海性低地では、波と風の方向と直交方向に堤列が形成され、それに規制された部分が潟湖となることを説明していただきました。

実習では、海性低地の地形図と空中写真の判読から、地形種の分類をし、地質状況や想定される地盤災害(液状化、軟弱地盤)について、参加者が実際に検討しました。

低地は人工改変の影響を受けている可能性が高いため、古い時代の地形図や空中写真も合わせて観察することが重要であることを再認識されました。

3. 山地の応用地形学

山地では、谷密度と谷の起伏が大きいほど岩盤が硬質でほど地山の透水性が低い等、地盤材質について判断できたり、水系の発達や不連続性から断層や褶曲など変動地形が読み取れることを説明していただきました。また、集団移動地形として崖錐や地すべりの地形や発達過程についても紹介していただきました。

実習では、地すべりと断層の地形判読から想定される地盤災害について検討をしました。

重力移動体の地形判読は災害現場等で多用することが多くより実践的なものでした。講師からは地形の気持ちになることが重要だといわれましたが、そこに到達するにはまだ経験不足であると感じました。

支部長が支部会員への還元として企画した、東北支部としては数年ぶりの座学形式の講習会でしたが、予定人数がすぐに集まり会場の大きさの関係でお断りする状況になるなど、関心は高かったようです。

内容としては短時間の講義で情報量が多かったため理解するのが大変でしたが、内容は実践的で密度が濃いものであったため有意義な講習だったと思います。

私も来年の応用地形判読士試験に向けて地形を勉強するきっかけになりました。

最後に無償で講師をしていただいた応用地形学研究部会の皆様ありがとうございました。

(文責：村上 智昭)